

コリン・ウィルソンと現代

多 田 博 生

I

コリン・ウィルソンの読者に向かって、彼の特徴を一言で表すとすれば、「物議をかもす作家」というのがいいのではないのでしょうか、と問いかけると、かなりの人が賛成してくれるだろうと思う。そういう答が多く返ってくるわけについては、これから議論していくところだが、ウィルソンという作家は愛読者の立場からみても、長短表裏一体化したところのある、魅力もあるが、欠点めいたところも目につく存在である。それだけに彼について何かを語ろうとすると、まずはそういう点にふれたくなる。

では彼のどういうところがそうなのかということだが、それについては一、二の例を挙げるだけでもわかってもらえると思う。例えば、「シェイクスピアの知的不毛さは覆いがたく、二級の精神の持ち主でしかない」と彼は言うが、「それだけでウィルソンの文学的センスのなさがよくわかる」との返答がすぐにでも返ってくるだろうし、そんなことを口にする男が、「自分こそ二十世紀の最も偉大な作家である」と壮語するのを耳にしたら、良識ある読者が彼を敬遠するのも不思議ではない。また、アカデミックな方面からは激しい批難が浴びせられ、ついには無視されるに至ったわけだが、それにも首肯できる点がないとはいえない。ちなみに彼に向けられた批難の言葉のいくつかを列挙すれば、杜撰、過信、冗長、独断、不作法等々にぎやかしいが、こうなると客観的な批評というより、感情的な嫌悪感が表に出てしまっているわけで、そういう批判を惹起した作家が再評価されることはきわめて難しいだろうし、そもそも作家活動を続けていく気力が萎えてしまうのではなかろうか。

そんな状況の中で、彼は1956年に処女作『アウトサイダー』(*The Outsider*)で彗星のようにデビューして以来——そのデビューぶりはバイロン(G.G.Byron)以来の華麗なものとしてウィルソンの読者の間では今も語り種になっているが、そのわずか半年後には文壇からの総攻撃の中で、彼は「墮ちた偶像」にされてしまったのである——今日までの間に80冊余りもの著作を世に問い続けてきた。そんなことがどうして可能だったのかと思うの

は筆者ひとりではないだろう。

弱冠24才の一流作家の誕生とはやしたてられ、檯舞台の上で世間の喝采を浴びていた若者が、手のひらを返したように批判され、ついには英米の批評界全体からの常軌を逸したような批難の的になってしまったのである。常識的には彼の作家生命はそこで終わりになるはずであったし、あらがっていても数年のうちに読者を失い、著作の刊行を引き受けてくれる出版社も見つからなくなってしまうのではないだろうか。だがそうはならなかった。彼の著作はコンスタントに出版され続け、それを支える読者も世界中に存在した。なかでも日本とロシアでは人気が高く、ロシアの知識人に最も読まれている現代西欧の作家はウィルソンだという。日本では、アカデミックな方面からは厚遇されているとはいいいがたいし、彼はもう終わった人との印象を持っている読者も少なくないのだけれど、著作の翻訳は相変わずさかんで、近年に翻訳された本の訳者あと書きの項では、「ウィルソンについてはあらためて紹介の必要もない」と書くのが常套になっているほどである。

いったい何が彼の孤独な闘いを支え、数多くの読者を引きつけることになったのだろうか。彼は一世紀に一人出るか、二人出るかといわれるほどの天才なのか、と問えば、彼の自己評価は別にして、否と答えるのが順当なところだろう。そのことは、古今の高名な作家の著作と彼の著作を読み較べてみれば、すぐにわかることである。かなり好意的な読者でも、彼に向けられた批難の言葉が悪意からのみ出ているのではないことに気づくはずである。そして一旦その観点から彼の世界を見はじめると、同じ主題を図式的に繰り返す点が鼻についたり、その主題を展開するために見境もなく多くの分野に手をつけていく方法が余りにも野放図に見えてきたりするばかりか、事実誤認や記憶間違い等が数多くあるにもかかわらず、自分の本で恥ずかしいものとか、出版を悔やまねばならぬものは一冊もない、と恬として言われると肩をすくめたくなくなってしまう。彼の欠点とおぼしきものは、それ以外にも少なくないわけで、それらを並べてみればますます「何故？」との思いは深くなる。

本人に問えば、おそらく、自分の主張の正しさ、自己への信頼、楽天的気質、それに不屈の意志が私の活動を支えてきたと答えるだろう。

第三者的に彼の特長点を挙げれば、文学、哲学、心理学、音楽から性、殺人、オカルト、といった多くの分野にわたる広い知識をもち、そこから興味深い内容の話を、説得的で、瑞々しい情熱にあふれた魅力的な語り口で語り続けることであり、しかもその照準は悪かれたように同じ主題を繰り返すことに向けられているという思い込みの強さには驚嘆すべきものがあり、そこ

からはアカデミズムにはない闊達さと、細分化とは逆のホリスティックな思考の魅力も生まれてくる、とでもいうことになるだろうか。細かくみれば他にも魅力的な点はあるわけだけれど、先にも指摘したように、彼の場合は長所と短所が表裏一体になっていることが多いので、ここでは渡辺恒夫氏の「イカガワシサ趣味と知的娯楽と自己探求と大いなる覚醒とを同時に求める欲張りな精神に応じてくれる希有の作家」⁽¹⁾という指摘を挙げておくにとどめたいと思う。渡辺氏の言は一応ほめ言葉と受け取っておけるものだが、その言葉からさえもアンビヴァレントな思いが伝わってくるのであれば、一般読者や批評家から見ればそういう彼はなおのこと敬して遠ざけておきたい存在ということになるのかもしれない。

自分の主張を理解できるのはほんのわずかの読者だけだ、とは彼が折りにふれて発言していることだが、彼を支えてきた読者がそれほど少数のはずはなく、しかも常に新しい読者を獲得し続けてきたと考えるのが自然だが、これまでのことで、その理由のいくつかが説明できたのであろうか。少なくともその一端にはふれ得たといってもいいのだろうが、筆者の実感からすると、それだけの説明ではどうしても納得がいかないのである。何を言いたいのかといえば、「ドストエフスキー体験」ならぬ「ウィルソン体験」とおぼしきものがあり、それがいわばイニシエーションとなって、彼の世界に魅せられていく読者も少なくないのではないかということである。

自分のことを語りすぎるのは憚られるので、翻訳家で、ウィルソンについての造詣が深い大瀧啓裕氏の「体験談」を引用してみたい。

しかるべき時期にしかるべき書物に出会い、その結果として新たな道がおのずから開ける僥倖は、読書好きな人なら誰しも身におぼえがあるだろう。大学にすべりこんだ当時の私にとって、コリン・ウィルソンとの出会いは、まさに天恵とも呼びうるほどの方向づけを果たしてくれた。目から鱗が落ちたという形容はあたらない。高くそびえていた壁が消え、いきなり目の前に果しなく広がる景観があらわれたようなものだ。これには個人的な経験が関係している。(中略) 小学校最後の年にまったくの偶然からマエストロ濫漚を発見して以来、ほそぼそとオカルティズムの世界を探っていたわたしにしてみれば、コリン・ウィルソンが『オカルト』で扱う万巻の書物は千天の慈雨に等しく、干魃にあえぐ大地が驟雨を呑みつくすように、注文しては読みふけるという熱い日々のつづいたことが、いまでもあざやかに思いだされる。コリン・ウィルソンの『オカルト』は、このようにわたし個人にとって、僥倖これにすぎるものはない、大きな意味をもつ書物になった。⁽²⁾

大瀧氏の語る内容は、筆者自身の体験にも通ずるものがあるし、そのよう

な「体験談」を、直接間接に耳にする機会は決して少なくないのである。そして一度でもそういう体験をした読者は、たとえその作家の作品が玉石混交であろうと、欠点が目につこうとも、自分の関心がまったくべつのところに移ってしまわない限り、たとえ間欠的であってもその作家の読者であり続けるものではないだろうか。その上、同時代人の関心を読みとる力にすぐれたウィルソンであれば、次々と新しい、若い読者を彼の世界に巻き込んでいくのも不思議なことではないだろう。

近年の例を挙げれば、1988年に出版された『オカルトを超えて』(Beyond the Occult)を読み、彼の年来の主張、つまり、人生も世界も見かけ以上に歓喜と意味にあふれており、自らの努力によって意識を自在に拡大・強化できるようになれば、その意味と歓喜を自己のものとし、現在の常識的人間観では想像もできぬほどに充実した、真に創造的な人生を生きることができるようになるのだ、との主張が一段と説得力を持って説かれているのに接して、ひときわの精神的高揚を感じた読者も少なくないはずだし、その方面に関心のある新しい、若い読者にとって、それは大瀧氏の体験と似たような文学的経験をもたらしてくれる作品ともなるかもしれない。自らの主張に対する思い入れと自信の強さが該博な知識とたくみに結びつき、そこから並大抵ではない迫力、説得力が生み出されてくるのである。彼が、『オカルトを超えて』は私の著作の中でも最も重要なもののひとつである、と言うのも無理はないと感じさせる力作である。

80冊もの本を書いていれば、すべてが傑作とはいえないだろうが、彼には『オカルトを超えて』に匹敵する作品が飛び石的にあり、それが彼のまわりに新旧の読者を集める力となってきたのだろう。そしてその力の源になっているのは、同時代の知的雰囲気と違和感を持ったり、新時代に向けての指針とか、考えるヒントのようなものを熱望する読者の感性に、彼の主張が強くアピールしたということではないか。次はその点から考えてみたい。

II

ウィルソンはサブカルチャーとか「闇の文化」に属する作家であると言う人もいるが、彼の考え方の内容や、その手法を見れば、そういう指摘にも妥当な面があることは理解できる。しかし、そういう点をあまりに強調しても図式的になるばかりだし、第一、そういう考え方では現代という時代の趨勢と齟齬をきたすのではないだろうか。

話を余り大きくするつもりはないが、現代がいわゆる大転換の時代であり、

これまでのパラダイムが大きく変化する時であるという考えは多くの読者の耳に届いていると思う。反応はさまざまだろうけれども、それは小手先の変化ではなく、近代の自然科学的発想が曲がり角にさしかかっているために起こってきた底の深い変化なのかもしれない、と感じている人も少なくないのではなかろうか。

例えば、近年、世界的現象にまでなってきたオカルティズムの爆発的流行ぶりをその変化の一環ととらえる人もいるだろう。オカルトとは手垢にまみれた言葉であり、それによって表される諸現象には暗く、怪しげなイメージがつきまとう。錬金術、占星術、神智学に、幽霊、ポルターガイスト、念力、UFO等々と、オカルトの領域にあるものはどれをとっても闇や陰がふさわしいと感じさせるものが多い。それらを実際に研究したり、体験したりしている人にとっては不満もあるだろうが、科学的思考法が主流を占める現代では、オカルトがそういう扱いをされるのも仕方がないことであろう。

とはいえ、現代はその科学的思考法や手法が行き詰まりを見せているとも感じられる時代である。それについては後にも少しふれるが、人々は科学を信頼しつつも、情緒的には科学的価値観や方法論に限界を感じ、疑問さえ持ち始めているのではないか。次代をひらくには、科学の網にかからないものをも重視していかなばならぬのではないか、と感じている人は少なくないはずである。人々がそのような考え出せば、これまであまり顧みられることもなかった現象が脚光を浴びることにもなってくる。とはいえ、それがあまりにも現代人の感性にそぐわぬものであれば、いかに「伝統」があるものでも人々の心を引くことは難しい。オカルトとて、古風な、おどろおどろしいままの姿では多くの人の気持ちをつかめまい。現代には現代にふさわしい意匠をこらしたオカルト的主張が必要なのではないか。それはオカルトというよりも「精神世界」とか「超心理学」といった名称の「衣装」をまとっていた方がよいだろう。

例えば、超能力や霊現象を強調する新興の宗教などがそういうものだし、当事者としてはこういうところで名を出されるのは迷惑かもしれないが、いわゆるニューエイジの考え方とか、ニューサイエンスやトランスパーソナル心理学、それに臨死体験や輪廻転生を現代的観点から考察していく研究なども多くの人々の共感を集めている。また、気功法や瞑想を実行する人も増えてきている。それに既存の科学的思考法の枠組みにとらわれずに、人間と地球環境に真に役立つ新しい産業技術や医療技術を生みだそうとする努力も盛んになされており、その面で実効を上げつつある新技術も少なくない。した

がって、この小論で筆者がオカルトとか「精神世界」という言葉を用いるときには、以上のような動向も踏まえていることをつけ加えておきたい。

それにしても近年のオカルティズムの流行には勢いがあり、ウィルソンが語る「最近の約10年のあいだ心靈研究の領域において、『情報の爆発的増大』が見られ、どこから手をつけたらいいのかわかりにくい状態なのである」⁽³⁾、という言葉からも、その勢いは感じられる。もっとも、勢いがあるからといって、それが科学と同様の信頼性、つまり実証性や再現性を持つかといえば、それは否であり、むしろ一步誤れば、すぐにも、そして際限もなく均衡を逸した妄想へと肥大化されていく恐れもあるだけに、その分野に対しては慎重の上にも慎重な対応が必要なことは何度強調してもよいと思う。

けれども、目を「正統科学」の方に向け、それが「精神世界」を求める人たちの期待にいかほど応えてくれるのかと問えば、今度はその実証性、再現性が問題になってくる。つまり「正統科学」は「一面で科学的手続きの禁欲ぶりを示しているが、反面これは科学の狭量さを露呈しているとも見られる。科学は、科学になじむものしか相手にできないのである。ということは、生物の精神的活動や生態行動の多くが、厳密な意味で科学の対象になり得ない事情を、ひそかに暗示しているのだ。」⁽⁴⁾これではオカルト側と科学の間に創造的な関係が成立するのは困難であり、両者はよくて独立並存であって、時には熾烈な反目が起こるのも当然かもしれない。

そんな状況にあっては、オカルト的なものを希求する人は、確実な羅針盤なしで未知の領域へ乗り出していくことになる。その結果は悲喜こもごもで、最悪の場合は、魑魅魍魎のばっこする闇の世界で不幸な結末を迎える人も出てくるだろう。もちろんその逆に「目に見えぬ真実」を体得したという人もいるかもしれない。

そういう動向を野放しにしておくのではなく、それが本当に人間と世界の幸せに寄与するものであるかどうかを見極めて対処していくことが重要なのはいうまでもないことで、そこに疑わしいものがあれば、それを制肘するのは科学の役割のはずだが、先にも見たように、既存の科学ではそういう動向に十分には対応できないのである。その上、科学自体にも変化を迫る波が押し寄せていて、例えば、宇宙や次元を扱う最先端の物理学とか、脳や遺伝子を扱う学問の分野の最先端では、もはや実証性や再現性を問うことも困難になっていると聞く。盤石の観があった科学でさえも修正を迫られているとすれば、そういう流れは否応なくその時代に生きる人々の感性や思考法に影響を与えるであろう。そして、あらゆる意味でパラダイムの変更とか大転換の

時代ということが声高に唱えられていけば、不安の闇が深い分だけ超越的なものを希求する気持ちも強くなり、自らの心の揺らぎに、より深く、より精妙に応えてくれるものをオカルト的世界に求める人も増え、ついにはオカルティズムが世界的に、しかも爆発的に流行し始めることになるのも不思議ではないのかもしれない。

今回の流行はいつまで続くのだろうか。過去に何度もあったように、いつの間にか先細りになってしまうのか。それとも新しい時代にふさわしい原理を打ち出すほどに発展していくものなのか。それについては意見の分かれるところだろうが、オカルト側にも希望はある。それは、これまで述べてきたように、現代が変化に直面した時代だということだ。その変化は私たちの科学的な世界観や人間観の修正を迫るほどのものである。最近よく耳目を引く言葉に、「支配と進歩の原理から共生と循環の原理へ」とか「競争から協調と愛へ」というものがある。それが私たちの生活にどれほど根付いているかは別にして、そういう言葉に抵抗を感じない人も増えている。現在の生活を成り立たせている考え方を棄てたり、修正したりすることが容易にできるかどうかかわからないが、協調や共生を重視する考え方が私たちの未来へ向けての指針のひとつであることは間違いないだろう。

しかし、考えてみれば、宗教的世界においては、昔からそういう考え方は唱えられてきているわけであり、オカルトの方でも健全なものは同じような主張をしてきているのであるから、共生や協調、愛を強調する考えが、現代に特有の新しいものというわけではない。それがあらためて脚光を浴びるようになった直接の理由は、科学技術と「支配と進歩の原理」が結びつき、それがあまりにも強力に、そして効率的に機能した結果、たとえ核戦争が起こらなくとも、環境破壊のために人類の生存が脅かされるまでになったことだろうし、底流としては、先にもふれた近代科学的思考法の限界を漠然とでも感じ、それを補うというか、それをも包み込む原理、あるいは価値を探し、求める人が増えてきたことが挙げられるのではないか。

前者が人類の存亡をかけた大問題であることは誰にとっても明らかであり、心ある人にとって、そこから目をそむけたままでは難しいことだろう。後者は前者のような直接的な影響力は薄い、時間の経過とともに人々の物の考え方の基軸までを揺り動かす可能性を秘めている。この両者だけでも、というより、この両者が私たちの考え方に及ぼす影響力が極めて大きいことはいうまでもない。それに加えて、政治的にも経済的にも転換の時期といわれ、情報革命をはじめとする何々革命のかけ声が飛びかうのを見てみると、

現代は本当にパラダイムの大転換の時代なのかもしれないと思えてしまう。

III

ここで話はウィルソンに戻るわけだが、そういう時代だからこそ、意識の拡大・深化を通しての人間進化を力説するウィルソンの再評価をすべきではないか、と続けられれば論旨のつながりは適当なのだが、話をそこに結びつけるには彼に関する情報がまだまだ不十分といわざるを得ない。

先に述べたことを少し繰り返すが、彼がデビューして40年、その間の著書も80冊余りになった。しかしアカデミックな方面からは冷遇というより、ほとんど無視されてきたということもあって、彼についての研究はあまりなされていないし、これからも活発な研究がなされる見込みは期待薄である。それでも彼の読者は世界中にいるわけで、その数も、彼の作家活動の期間と出版物の点数を考慮すれば、決して少なくないはずである。愛読者の率直な気持ちを代弁すれば、その落差が気になって仕方がないというところであろう。

デビュー当時、彼と英米の文壇周辺との間でどのような軋轢や葛藤があったかを調べてみれば、その後の冷遇の理由もわからぬわけでもないのだけれど、それにしても、そんな扱いを受けながら、独力で世界中に読者を獲得していった作家を、その後も何十年と無視し続けるというのはどういうことなのだろうか。彼は本当はどの程度の作家なのか。彼が批判されねばならぬとしたら、どういう点が問題なのか。言い換えれば、読者は彼の言うことを信じていいのか悪いのか。悪いとすればどこが悪いのか。その主張の内容や、強烈な自信、あるいは縁のある読者を何としてでも説得し、自分の主張を信じさせようとする気迫などを考えると、彼には、いわば、「ウィルソン教の教祖」のようなところもあるだけに、もし彼の説くところに「淫祠邪教」に堕しかねない点があるのなら、ぜひそれを指摘してほしい、と思っている読者もいるかもしれない。彼に浴びせかけられた批難の意味もわからぬではないけれど、そういう本質的な疑問にも答えてほしい、というのが一般の読者の素朴な思いであろう。

そこで、これまでに出版されたウィルソン関係の研究書に目を向けると、筆者の知り得た範囲では、現在までに欧米では13冊出ている。⁽⁵⁾ その中には、今では古くなってしまったものがあるし、アンソロジー形式の一部でウィルソンを論じてあるものや、小説に焦点を当てたもの等があって、正面からできるだけ包括的に彼を取り上げたものは数冊程度にしばらくだろう。

日本では、単行本の形式で出版されたものは見当たらず、2冊の雑誌が特集を組んでいる。(6)

それだけ出ているだけでも、読者としては喜ぶべきことだろうが、ウィルソンという「微妙な立場」にいる作家を扱う関係からか、それらはどちらかというで紹介する方に力点が置かれていて、読者の疑問に十分に答えてくれているわけではない。今後とも、読者の期待に応えるような研究がなされるかどうかはわからないし、そういう研究の結果として、愛読者の思いにそむく考察結果が示されることも考えられるのである。

つまり、「心靈研究の領域において、『情報の爆発的増大』が見られ、どこから手をつけたらいいのかのかわかりにくい状態」にある中で、オカルティズムの世界的流行がみられ、新時代に向けての考え方も次々に提言されている時代にあっては、デビュー当時はきわめてセンセーショナルであった彼の主張も、新しい思潮のうねりの中に吞み込まれてしまっていて、もはや、ことさら独自性を強調する立場にはいない、との判断が下される可能性もあるのである。そういう判断に接することは残念であるが、それも一つの意見として受け入れるのにやぶさかではないというのが大方の読者の気持ちではなかろうか。

というのは、たとえウィルソンが新しい思潮のうねりの中に吞み込まれてしまったとしても、彼は彼なりの役割をりっぱに果たしたのだと思っている読者もいるからである。その役割を一言で説明するのは難しいが、あえて言えばこうなのではないか。

それは、唯物的世界観や科学的人間観といった考え方が圧倒的な力を持ち、悲観主義的な傾向が知的世界を覆いつくしているかのように見えていた時代に、楽観主義のたいまつを掲げ、人間の豊かな可能性を高らかにうたい上げ、周囲の批難にも挫けることなく、無理解の荒野をドンキホーテのように突進していった男。その勇気にあふれた不屈の闘いは世界中に読者を獲得し、共鳴者を生み出していった。そして、もしかしたら、その活動が今日の新しい精神的潮流の案地を形成するのに相応の役割を果たしたのかもしれないし、少なくともそういう潮流が勢いを得るまでのあいだ、時代の雰囲気と違和感を感じていた読者の気持ちを代弁し、その心を励まし続けることに大きく寄与してきたのだ、というものである。

一人の作家・思想家としては、そのことだけでも「以て瞑すべし」というところだろう。しかし、自信家で、楽天主でもあるウィルソン本人としては、その程度の評価ではとても納得できないところだろうし、来世紀あたりには

新時代への先駆けとなった思想家とか、人間進化の扉を開いた作家との評価を与えられる可能性もないとはいいい切れない。そのあたりのことを判断するには今少しの時をかすべきだろう。けれども、そういう問題ばかりでなく、ウィルソンという作家の人と思想そのものをより深く理解したいと考えている読者も存在するわけであり、そういう読者の思いと考察への努力が、またウィルソンという作家の姿を明らかにすることにつながっていくことだろう。

彼は1931年の生まれだから、もう60代半ばの年齢に達した。だからもう新しい発展は期待できないというわけではないが、最近では、「ウィルソンも文献紹介屋になってしまった」との陰口を耳にすることもある。読者としては一層の活躍を望みたいのはもちろんだけれど、先にもふれたような新しい考え方がさまざまに勃興してきている現代は、彼が刺激的な著作を次々に発表していた頃とは一線を画しつつある観があるのも事実である。

1994年12月25日に劇作家のジョン・オズボーン(John Osborne)が死去した。そして1995年10月22日にはキングスレイ・エイミス(Kingsley Amis)も逝った。オズボーンとエイミスは、かつてウィルソンやジョン・ウエイン(John Wain)と共に「怒れる若者たち」とはやしたてられ、当時の読書界に新しいブームを巻き起こしたこともあったわけだが、あるいはそのオズボーンとエイミスの死が何事かの終焉を物語っているのかもしれないといえ、やや詩的に過ぎるだろうか。

とはいえ、筆者はウィルソンがすでに「過去の人」になったといっているわけではなく、彼の周辺が落ち着きを見せてきた時であればこそ、その世界に関するより冷静な考察が可能なのではないかと考えているのである。筆者は1978年に「アウトサイダーとしてのコリン・ウィルソン」という小論を書いたことがある。そのときの経験から、彼のことを書くのは今少し時間をおいた方がいいのではと思案して、その後は彼の著書や関係資料を集めつつ静観してきたのだが、このあたりであらためて考えてみていいと思ったわけである。

その判断がどこまで当を得たものかはわからないし、博覧強記をもってなる彼の世界をどの程度探求できるかについては心もとないかぎりではある。しかし、大瀧啓裕氏と同じように、若い頃に大きな影響を受けたウィルソンの世界を考察してみたいという気持ちは今も持続しており、自分なりに筆を進めてみたいと思っている。

「木はその果実によって知られる」とはバイブルにある言葉だけれど、それは、さまざまなオカルト的現象をはじめとして、客観的な評価が困難な対

象を観る時には有効な尺度である。そしてそれはウィルソンのような、人間のあり方や生き方を問題にし、しかも評価の定まっていな作家の主張の眞贋の程度を考える際にも役に立つ尺度となるであろう。

彼は、人間はより高度な存在へと進化すべきだと主張し、それは、進化こそが自らの目的なのだと深く自覚し、強い意志力を働かせることによって可能になるのだと説く。そうした主張に接した一般読者の反応は、何と現実離れた実現困難なことを説く作家であろう、というのではないだろうか。現代のように、いわゆる「精神世界もの」が流行している時代にあっても、彼の主張が一般受けすることは期待薄である。ならば一時代前の彼に対する風当たりの強さはどれほどのものであったかと想像されるわけだが、そんな逆風の中を闘い抜いてきた彼の意志力の強さにはあらためて驚かされる。

そういう主張をし、その結果としていばらの道を歩まねばならなかった人物にはいわゆる「変な人」が少なくないものだが、ウィルソンはそういう人物評とは無縁である。それどころか、彼を知る人たちは、謙虚な人、誠実で正直な人、優しいうえに勇気と忍耐力をも備えた尊敬に値する人との賛辞を惜しまないのである。それは、彼の読者にとってまことに幸いなことである。理由はいうまでもないだろうが、彼のように、「人間は自分を救うことができる」ということを全作品を貫くテーマとしてきた作家が、自己憐憫にふけるはみ出し人間といわれ、病的で不自然で奇矯な人物といわれたのでは、言行不一致ここに極まりということになり、その主張に耳をかす人はほとんどいなくなるであろう。

逆に、その恵まれなかった作家生活にもめげず、自分の信念を貫き通して、しかも、一度彼に会えると、それまで敵であった人も友になってしまうといわれるほどの人格を自己のものとした彼の人生そのものが、一貫して主張してきた人間の意志理論の正しさを示しているともいえるのではなからうか。彼自身が自らの哲学の「良き果実」として存在しているといってもいいだろう。そうであれば、読者としては、必要以上の懸念を抱くことなく、彼の考えに耳をかせるというものである。

筆者としても、変化の著しい複雑怪奇な時代に、冷笑に耐えながら、人間の生きるべき道を提示し続けたウィルソンの勇気と不屈の意志に深い敬意を払うことを忘れずに、その世界を探究していきたい。

注

- (1) 渡辺恒夫：「エロスとオカルト」(『ユリイカ』8月臨時増刊号、青土社、1988)、p. 109.
- (2) 大瀧啓裕：「アウトサイダーの夢見る力」(『銀星倶楽部』9号、ベトヨル工房、1988)、pp.113-114.
- (3) コリン・ウィルソン：『ミステリーズ』(高橋和久他訳、工作舎、1987)、p.43.
- (4) 荒俣宏：「『サイキック』を読むために」(コリン・ウィルソン：『サイキック』、梶本靖子訳、三笠書房、1991) p.28.
- (5) 1. Campion, Sidney: *The World of Colin Wilson* (Frederick Muller, London, 1962).
 2. Booker, Christopher: *The Neophiliacs* (Collins, London, 1969).
 3. Dillard, R.H.W. et al. (eds.), *The Sounder Few* (University of Georgia, Athens, 1971).
 4. Weigel, John A.: *Colin Wilson* (Twayne, Boston, 1975).
 5. Bendau, Clifford P.: *Colin Wilson* (Borgo Press, San Bernardino, 1979).
 6. Hewison, Robert: *In Anger* (Weidenfeld & Nicolson, London, 1981).
 7. *20th Century English Literature: A Soviet View* (Progress Publishers, Moscow, 1982).
 8. Tredell, Nicolas: *The Novels of Colin Wilson* (Vision, Barnes & Noble, London, Ottawa, 1982).
 9. Bergstrom, K. Gunnar: *An Odyssey to Freedom : Four Themes in Colin Wilson's Novels* (Almqvist & Wiksell, Stockholm, 1983).
 10. Allsop, Kenneth: *The Angry Decade* (Goodchild, Wendover, 2nd edition, 1985).
 11. Ritchie, Harry: *Success Stories* (Faber & Faber, London, 1988).
 12. Stanley, Colin (ed.): *Colin Wilson: A Celebration* (Cecil Woolf, London, 1988).
 13. Dossor, F. Howard: *Colin Wilson: The Man & His Mind* (Element Books, Longmead, Shaftesbury, Dorset, 1990).
- (6) 上記(1)と(2)の『ユリイカ』と『銀星倶楽部』